

■文庫版付録

福澤桃介とは

1924年、ニューヨークの一室で前大統領や上議員議員、財閥や大企業の重役といった、そうそうたる人々を前に拍手喝采を浴びた日本人がいた。反日感情が高まっていたころの米国でのことである。その人物こそ、誰あろう福澤桃介である。

「電力王」「相場師」「好男子」などさまざまなイメージで語られる彼はどのような人物だったのだろうか。

■生い立ち

福澤桃介は、1868年埼玉県のとある貧家の次男として生まれた。旧姓は岩崎桃介。ゲタすら買ってもらえないほど貧乏だった少年は、幼心にも「金持ちになる！」という思いを人一倍強く持っていた。

幼いころから才知に長け神童と謳われた桃介も、実家の貧しさから兄同様奉公に出されるはずであった。しかし、それを聞きつけたある人物が、桃介をこのまま奉公人で終わらせるのは、あまりにももつたいないと両親を再三説得。両親もなんとか学校に進ませてやりたいと考えていたため、どうにかしてでも資金を工面しようと奔走し始める。

婿養子である父紀一は、いまは落ちぶれてはいるが、実家は八十五銀行設立者の一人という名家である。そこで、そのつてを頼ることなどで、かろうじて資金を工面した。こうして、桃介は進学することができたのである。

■転機となった運動会

両親のお陰で無事に慶應義塾に入学した桃介は学生生活を楽しんでた。のちに浮名を流した貞奴こと小山貞と出会ったのも学生時代のことである。

貧しい生活ながらも充実した時間を過ごしていた桃介に、人生の転機となる日が訪れた。慶應義塾の運動会のことである。



房自身が運動会の桃介を見て頬を赤く染めたなどの話もあるが、美男子と誉れの高い桃介が女性陣からの視線を集めたのは想像に難くない。

さて、慶應義塾の教諭を介してこの話を持ち込まれた桃介は、縁談など考えられないと真剣に話を聞こうとしない。なぜなら彼は、慶應義塾卒業後に留学を考えていたからである。養子話も縁談も、若い自分には関係ないことだと断った。

ところが、話を打診した教諭のほうがこの果報の大きさを理解していた。学生生活ですら窮していた桃介に、渡航には大きな費用がかかるだろうと言葉を添えた。

この言葉は桃介の心を揺るがせた。養子になれば大きなバックボーンを得ることになるのだ。その魅力は果てしなく大きい。悩んだすえ、両親や友人の勧めもあり、慶應義塾在学中に彼は養子になることを決意したのである。

彼がこのとき、結婚という人生の大事よりも目の前の洋行に釣られた感があるのは否めないだろう。かくして桃介は、希望どおり慶應義塾を卒業したのち、すぐにアメリカに留学したのである。

渡米後は、ニューヨーク州のイーストマン・ビジネス・カレッジに通った。さらに、ペンシルベニア鉄道で見習いをした。

この見習いは、諭吉から「今後、日本では鉄道を普及させる必要がある。留学中に勉強するように」という指示であったという。桃介の帰国後の生活を考へてのことであろうか。当時、日本では北海道炭炭礦鉄道の設立が予定されており、福澤諭吉も出資者の一人として名を連ねていた。そのためか、福澤桃介は帰国後すぐに北海道炭炭礦鉄道に入社している。

いずれにせよ、米国で有意義な時間を過ごしていた桃介であったが、渡米中に実

眉目秀麗な青年が、真っ白なシャツに手書きのライオンを描いた格好で颯爽と競技を楽しむ姿に、目を奪われた人物があった。福澤錦——福澤諭吉夫人である。彼女は「次女房の婿候補に桃介を」と考えたのである。そして福澤諭吉に相談し、説得に努めた。この経緯に関しては、福澤諭吉自身が桃介の才知にほれ込んだとか、

両親の訃報を知り、当初の予定を切り上げ3年弱で帰国することになった。と同時に諭吉の次女、房と結婚したのである。

なお、福澤諭吉の養子といっても相続権はなく、房を娶っての福澤家の分家という立場である。福澤諭吉には4人の実息があったためであろう。それでも、アメリカからの帰国後すぐに北海道炭礦鉄道に入社し、毎月百円という高給を手にできたのは、福澤諭吉の名が大きかったといえる。

■挫折の重なり

入社からしばらくして、桃介は開設したばかりの東京支社に転勤になる。このころ、毎日の散歩を日課としている福澤諭吉に、学生とともに桃介もお供をしていた。寡黙に考えごとをしている風な諭吉とは対照的に、面白おかしく話をして盛り上げる桃介は学生たちから慕われていた。

会社でも、石炭の販売や海外輸出の一切を指揮して業績を飛躍させるなど実力を発揮していた。1981年には長男駒吉が誕生。公私共に充実していた矢先のこと

思いがけないことが起こった。1984年の日清戦争勃発による激務のさなか、貨物船の引き渡し当日、のどに熱さを感じたとたんに甲板に真っ赤な血を吐き出した。桃介27歳の年のことである。

肺結核となり病氣療養を余儀なくされるが、責任感から病院を抜け出すこともしなばしな。けれども周囲の助言もあり、療養に専念することにして会社も退職した。

在籍中にすっかり貯蓄はしていたといっても、生活費のうえに治療費がかさむ。だからといって福澤家に援助を申し出ることを潔しとしない桃介は、この療養中に株式投資を始めるようになった。



療養中のベッドの上で数冊の投資本を読み、さらに北海道炭礦時代の仲間からの手ほどきで株式投資を学んだ。にもかかわらず、貯蓄を元手に巨額の資金を儲けてしまったのだから、天賦の才能があったことは間

違わないだろう。しかし、そんな桃介を見て、福澤諭吉は「桃介が相場師になってしまった」と嘆いたという。

その後、病状が良くなると仕事への意欲もわいてきた。そこで、株式で儲けた金をもとに木材の輸出をメインとする「丸三商会」を設立。のちに「電力の鬼」と謳われた松永安左エ門とともに、毎日仕事に奔走していた。

そんなある日、会社の命運を担う大事業の依頼が入った。浮かれる二人だったが、取引に際し興信所が発注先の商社に対し、「福澤桃介は信用できない」という報告を行った。これにより商社および銀行までもが取引を中止。資金繰りを絶たれた丸三商会は、倒産に追い込まれてしまったのである。

この事業失敗は、桃介に大きなショックを与えた。それは倒産という事実よりも、急に手のひらを返した銀行に勤める先輩、興信所の報告書に事実以上の内容を書いた同輩、そして相談話を聞いてもくれなかった親戚など、周囲の人々への不信感によるものであった。

さらに、この窮地に奔走していたさなかに列車の中で桃介は再び吐血をし、再度の療養を余儀なくされた。このころのことを、のちに「甘い人生であった」「友人に頼ってはいけない」と回顧している。

再び回復したのち、北海道炭礦鉄道の元上司に誘われ、三度目の復帰を果たした。その後の数年間は、サラリーマン生活として穏やかな時間だったようである。

■売り逃げの桃介

さて、株式相場の名人、天才と称された桃介の相場人生で最も派手に勝ちまくったのは……。

1904年の日露戦争のあおりを受けて、日本はバブルに踊らされた。株価は軒並み上昇を続け、本書の中にもあるように全国津々浦々、投資になど縁のなかったお年寄りまでもが株式投資に入れあげようになっていたのである。

当時165円台だった東株(東京株式取引所株)は800円近くまで値上がりし、このまま1000円台まで行くはずだと誰もが買いに走った。

しかし、行き過ぎた熱狂はいつかは終わる。それが訪れたとき、市場は多くの投

資家の資金を一瞬にして飲みこんでしまうのだ。

そしてついに、そのときが来た。人々が投資に夢を見た東株はなんと、128円まで下落した。日本国中が、なけなしのお金を失い夢は絶望に変わった。ところがそんななか、福澤桃介はいちばんのピークで見事に売り逃げていたのである。

彼は、東株が暴落を見せる直前にきれいに売り抜け、そこでドテン売りに転じ、この大相場で往復勝ち取る「のこぎり商法」をやったのけた数少ない相場名人である。その額、数十億円とも言われる大金である。

桃介には5つの投資信条があったようだ。

- ・兜町と逆に行くこと
- ・日ごとの小波動には目もくれず、遠方を見ること
- ・腹八分目でとどめておくこと
- ・早耳は信用しないこと
- ・事前に企業業績を調べること

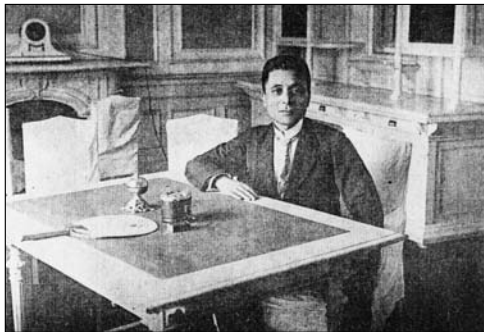
である。いかにも長期視点の要素が強いが、実際の桃介は相場の局面で俊敏に立ち回っていた。ヒラメキが強く、言動が一致しないところも、桃介らしい要素といえるかもしれない。

■実業界へ転身

相場で築いた巨万の富を元手に、桃介は本格的に実業界に参入する。当初は試行錯誤の連続で多方面に目を向けては会社設立に名を連ねていた。

慶應義塾の先輩の口ききで名古屋電燈の常務に就いたときのことである。腰の軽い桃介は自らの足で各地を探索していた。その際、木曾川を見るにいたり、その水量・落差の大きさなどに深く魅了された。そして、今後の水力発電の可能性を強く感じたのである。

しかし、当時は名古屋士族との確執にあい、わずか半年で退社。1914年に復任するまで、全国各地の電気会社やガス会社で重役に名を置き、電力に関するノウハウを蓄積していったのである。



そうして1914年、名古屋電燈の社長に就任した際には『互戒十則』を掲げた。

- (1) 我々の享くる幸福は、十万需要家の賜物なり
- (2) 我々は寸時も、需要家の恩恵を忘却すべからず
- (3) 需要家の主張は常に正当なり。懇ろに応接すべし
- (4) 故障を絶対に予防し、需要家に満足を与うべし
- (5) 時間と労力は貴重なり。最も有効に使用すべし
- (6) 其日になすべき仕事は、明日に延ばすべからず
- (7) 細事も忽にする忽れ。一物も損なう忽れ
- (8) 議論と形式は末なり。実益を挙ぐるを本とせよ
- (9) 不平と怠慢は健康を害す。職務を愉快に勉めよ
- (10) 会社の盛衰は我々の双肩にあり。協力奮闘せよ

大胆不敵で人間の機微には疎いと思われがちな桃介だが、大胆さとともに細心さ

を兼ね備えた人物である。それは、仕事に対しても友人に対しても同様であった。

■懐の広さとは

桃介は金を大事にしていた。それは、己の懐からはいっさい、誰にも渡さないというケチな考えから来ているわけではない。「死んだ金」の使い方はしないというだけのことである。それらは、幼いころの環境や福澤諭吉の教え、さらに丸三商会倒産という苦い経験からも来ているのである。

しかしその経験は、強い立場にいる者への反骨の精神となり、弱者の痛みに同情を寄せるための経験にもなったといえる。彼は先に出た松永安左エ門をはじめ、多くの同輩や後輩を気にかけてい

た。

例えば、学生時代に知り合った石山賢吉が、経済雑誌を出すかと桃介に話をしたことがあった。1913年のことである。そのとき桃介は、「雑誌はやめておけ。悪口を書かなければ売れないし、書けば書いたで恨まれる。きみのようなおとなしい人間には無理だ」と論じた。そして、「自分は生命保険会社設立の申請をしている。雑誌社設立の代わりに、そこを任せてやろう」と持ちかけたのだ。しかし、石山は桃介の誘いを辞退し、自らの熱い思いをもとに会社を設立した。

会社設立後しばらくして、石山は桃介と再会した。雑誌の売れ行きはどうだと聞く桃介に、石山は正直に厳しい現状を伝えた。桃介は「そうか、それなら」と資金の援助と、さらに周囲へ援助の呼びかけも行ったのである。

援助金を渡す際も、あからさまに渡すわけではない。別れ際に、何事もないように渡すのである。そもそも、桃介のアドバイスに背いてまでも事業を起こしたのである。そんな自分に嫌味ひとつ言うことなく親身になってくれる桃介の優しさに、石山はとても感動したという。

ましてやその支援は、桃介自身が関係する会社のために、その雑誌をうまく利用しようとして行ったことではない。それどころか、誌面に己の会社に関する不利な内容が出たとしても、それが至極まっとうな議論であれば笑っているのである。石山は著書『回顧七十年』（ダイヤモンド社）のなかで、「福澤さんほどわたしを助けてくれた人はいない」と心からの感謝を述べている。

これがいまなお日本で読まれている、経済誌『ダイヤモンド』のスタートである。

■電力事業への着手

桃介が後年、注力した事業に電力開発がある。木曾川に魅了されて、人生をかけて挑んだ事業は、最初からすべてがうまく進んだわけではない。名古屋財界人との確執による名古屋電燈の再編や会社改組などにより、基盤となる大同電力を設立したのが1920年——同社はのちに、五大電力資本の一角と言われるようになる。

これを基盤に、木曾川水系の開発に生涯を通して注力していくのである。



いざというときに必要な資金として。留学経験があり英語は堪能だといえども、金ほど強いものはない。しかも小国の一市民が金貨を所有しているとすれば、なおさらである。数珠は、宗教心の厚いアメリカ人から信用を得るためである。見慣れない数珠を見た人々から「それは何だ？」と聞かれたと

さて、ダム建設には資金がいる。しかも、この大井川ダムは発電専用である。その費用は莫大なものだ。着工が進んだ1923年、事業中止を余儀なくされることになった。関東大震災である。直接の被害はないとはいえ、日本経済が大打撃を受け、資金繰りの目処が立たなくなった。だからといって、ここで諦めるわけにはいかない。

国内がだめなら、国外へ！ 桃介は、当時まだ反日感情が盛んなアメリカへ、社債発行による外貨獲得を考えたのである。なんとも奇抜な発想である。

なぜなら、目指す資金は3000万ドル。いまの100億円ほどの資金である。そこまでの大金にも関わらず、政府を介した事業ではなく一民間企業の要請なのである。

無謀なのは事業の大きさやアメリカの排日感情だけではない。日本国内でも、アメリカに金を借りるなど売国奴である！ という批判の声も少なくなかった。

現に桃介は当時、命まで狙われていたのである。

■アメリカ凱旋

それでも事業のために、アメリカへ渡った。旅の荷物は、金貨5000円、マニラロープ1本、数珠ひとつ、そして、越中ふんどし50本であった。

これにはれっきとした理由がある。

マニラロープは、火事が起こった際にホテルの窓から逃げ出すため。金貨は、

きに、信仰心の表れたと言えば、彼らはその心を敬うはずだというのである。では、ふんどしはといえは……。

命を狙われている以上、いっどこで命を落とすか分からない。死んだときに、汚い下着を身に着けていては、日本人の名折れであるという思いからであった。毎日新しいものにはき替えては古いものを処分しようということだった。

しかし、ここでも桃介の人間らしさがにじみ出る。アメリカに滞在して数日、お付きの者が桃介の部屋に入った。バスルームで洗い物をしている桃介を見つけ、何をしているのかと尋ねると、ふんどしを洗濯しているのだという。使い古しははかないとはいえ、汚いまま捨てるのはしのびないというのだ。

さらに、街を歩くときには新聞紙の包みを持ち歩いている。付き人が再度尋ねると、いくら洗ったとはいえ使用済みのふんどしをホテルで処分すれば、ボーイに見られてしまう。街中に捨てるようとも、当時のニューヨークはチリひとつないキレイな街並みで、ここに捨てるのもいかなものかと思案しながら新聞紙にくるんだふんどしを持ち歩いていたというのである。

「日本での資金調達が大変ならアメリカで！」という意外性からはかけ離れた、日本人としての体面や誇りの高さの持ち主である。

■成功へのスピーチ

さて、そもその渡航目的は資金調達である。そんなある日、財界人や著名人が集まる席で、桃介はスピーチを行った。

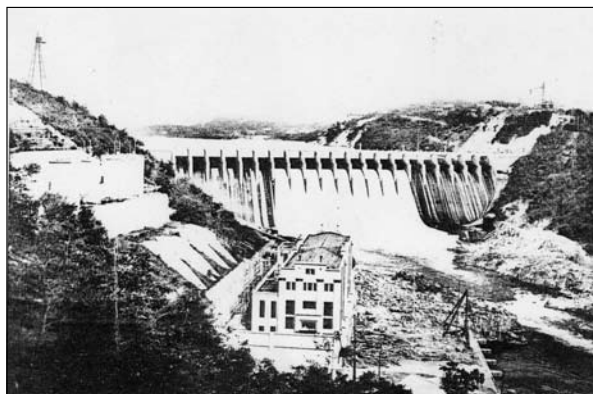
「日本は資源の乏しい国だと思われるかもしれませんが、それはちがう。人が多い。山が多い。それは立派な資源である」と語りだし、山からの水にも恵まれた日本での水力発電の有利さを説いた。

さらに「アメリカは、いまや世界最大の富強を誇っておられる」とアメリカを賞賛した。

そして「しかしアメリカは黄金の毒素によって、今にローマのように衰亡する道を歩いています。その国から金の毒をわずかながら取り出してやろうとする私は、実は貴国から感謝されていいはずですよ」と言い放った。

■晩年の桃介
他方、艶福家として語られることの多い福澤桃介。実業界を離れた世界では、福澤桃介というよりも、日本人の女優第一号とされる貞奴との恋仲が有名ではないだろうか。この物語は、NHK大河ドラマ『春の波濤』として放送されたほどである。

二人の出会いが学生時代、桃介がまだ房と結婚する前のこと。貞(旧姓 小山 貞)が馬術中に野犬に襲われかかったのを桃介が助けたことがきっかけだった。しかし



「アメリカから金の毒素を取り除いて、感謝されてもよいと思う私はこの次、さらに喜ばれることをしにやって参ります。この次は、アメリカに金を貸しに参ります」と最後には力強く宣言したのである。
これには会場中が、拍手喝采となった。桃介の目的は見事果たされたのである。

■木曾川水系の開発

こうして事業資金を手にした福澤桃介は、次々と木曾川流域にダムを建設していく。「一河川一会社」主義のもと、それぞれの適地に発電所を建設。木曾川水系だけで設立した発電所は、賤母、大桑、須原、桃山、

読書、大井、落合の7箇所にもなる。こうして、洪水を起こしては住民の生活を脅かしていた木曾川は、人々の生活を穏やかに豊かなものへと変化させたのである。

下流域である名古屋には多くの事業が発達し、それに伴い人口も増えた。人が増えれば地域が活性化する。その結果、大都市へと変貌を遂げたのである。

なお、国家を頼らず、出せぬ日本を恨まずアメリカに道を見出した桃介は、のちに約束どおりしっかりと利息をつけて返済している。



その後、桃介は房と、貞は川上音二郎と結婚する。

長い間二人は別々の生活を送っていたが、貞奴が夫と死別し、さらに女優も引退したのち、再度桃介との仲が急接近した。公の場に二人して顔を出すなど、公然の仲ではあったが、桃介は房と離婚していたわけではない。

1938年、桃介の葬儀には妻房、妹

の杉浦翠子、そして貞の三人の姿があったという。

実の妹杉浦翠子は、歌人である。その生き方や考え方の違いから、あまりソリが合わなかったという二人だが、晩年は桃介が丸くなったこともあり、理解し合えるようになった。

桃介の体調が悪くなり、見舞いに訪れた翠子に桃介はある漢詩を見せた。

以錢沽樂身招累 参道人天心得安

お金で楽しみを買えば身を患い、社寺に参り天に任せば心は安らぎを得るといった内容である。生前、お金の大切さや怖さを、ことあるごとに翠子に知らしめていた兄桃介の姿は、懺悔する好々爺のようであったと語っている。

相場の世界においても、実業界においても、異彩を放った福澤桃介は、70年の生涯を閉じ、いま静かに多磨霊園に眠っている。